

リーフデ号の追憶

中 林 幸 夫

(会員 香川県綾歌郡国分寺町)

佐伯史談第一八二号『リーフデ号 漂着地、シヤチヅイ (X A T I V A I) の論証』(宮下良明)を拝読して、昔が懐かしくなり筆をとりました。

たしか、村井さんがリーフデ号についての疑問を初めて発表したのは十三年も前のことでしたね。

当時、村井さんは、リーフデ号に情熱を燃やしていたので、私が薬局の方へお訪ねしたら、わざわざ実家の書齋に案内してくださって、詳しい話をしてくださいました。

その後、私が疑問を持つたたびにおじゃまを喜んで話し相手になってくれました。村井さんが燃やしていた情熱が今も思いだされます。

その頃は、清田先生もお元気で、私に、佐野市の龍江院にある、リーフデ号の船尾のエラスラムの木像の話を聞かせ、リーフデ号の漂着地点は佐伯に間違いないと力説しておられました。

思えば、お二人ともあの世で、まだ考えにふけっているのではないかと思ったりします。

このたび、宮下さんの、タチバエを読んで感心し、納得したのですが二三、疑問が湧いてきたので、次のことがらについて、自分の意見を申し述べて見たいと思います。

(一)一六〇〇年頃の地図にはあまり地名が書き込まれておらず、そんな時代にタチバエとか唐船バエとかの地名を使っても、おそらく日本人でも、それらの地名を探すことはできなかつたと思います。

だから、アダムスが妻や母国などへの手紙に、相手が全く認識できないような地方の小さなハエなどの地名を書くことはなかつたのではないかと思ったりもします。

その頃、日本・琉球・朝鮮などで使用していたという『海東諸国総図』を見ると、九州東岸で書かれている地名は、



『図1』ピーテル・ファン・デン・ケーレの海賊版地図部分（世界古地図より）



マテオ・リッチ作成の世界図部分（世界古地図より）

たりま
えであ
り、そ
のよう
なとき
に、小
さなタ
チバエ
とか唐
船バエ
という

赤間関（下関）文字関（門司）左我（佐賀関）
だけが書かれています。

また、西洋で使用していたものを調べてみると、『図1』は、一五九六―一六〇二年に設立されたオランダ東インド会社のオランダ船、数十隻が東方航海に持って行ったものと書かれています。

また、昔は港というものがあまりできていなかったの
で、大型船は沖がかりをして錨を入れるのが常識で、
リーフデ号が陸岸より、一リーグに錨を入れたことはあ

表現を使用することは常識的に考えると少しおかしいよ
うに思ったりもします。現代では、船の位置は、著名な
物標からの距離で表します。

(二)私は以前、X A T I V A I が佐志生、指夫でないこと
を証明するために、V A I はバイ、即ち、湾（英語の B
A Y、フランス語の b a i e、ドイツ語の b a i）では
ないかと考えたことがありました。

あの辺で、湾と呼べるものは、

白杵湾、津久見湾、佐伯湾、蒲江の河内湾しかないの

で、ゴウチ湾ではないかと思つたこともありましたが、最近では、V A I は湾でないと考えています。

(三)最近、中国語を習い始めて、中国人は、昔も今も、日本の地名や名前であつても、漢字で書かれているものは、中国語の発音でしか読まないことを知りました。

彼らは、大阪と書かれていれば、けつしてオオサカとは読みません。大阪は d a b a n、長崎は c h a n g q i、豊後は f e h g h o u、と読んで、ナガサキ、ブンゴと日本語式には読みません。

そこで、佐伯を何と読むのかと聞きましたら、佐伯の佐は、x i a o または、z u o、佐伯の伯は、b a i と読むそうです。バイなのです。

中国語の発音は、北京、広東、福建など地方によって少し発音が違うそうです。

当時、豊後地方には、唐船が出入りしていた関係で、佐伯はサイキと云われずに、中国語で読まれたものが、西洋人に伝えられていたのかもしれませんが。

その頃に日本の地名は、中国人が発音したものが世界中にひろがり使用されていたかもしれません。

亜細亜誌の中にも、長崎？がランガサケ、マカオがア

マカウというふうには呼ばれており、これらは、中国人が発音したものを西洋人が耳にしたまま書いているように感じます。

こんなことを考えていると、佐伯、即ち、

X I A O B A I と中国人が発音したものを、アダムスが訛つて聞いて X A T I V A I と書いた可能性があるように思えてならないのです。

中国語では、X はシャ行でありますから、日本語になるとサ行になります。

X A T I V A I は、ひよつとするとそのまま、佐伯のことかもしれないのです。

佐伯市は日中友好関係で中国語を勉強している人が多から、X A T I V A I が佐伯のことにならないか、考えてほしいものです。

私も佐伯を離れて、早、五年になりますが、リーフデ号のことは、村井さん、清田先生らと同じように気がかりです。